

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 小池 晃次

論 文 題 目

Synchronic and Diachronic Aspects of Locative Inversion
and Negative Inversion in English

(英語における場所句倒置と否定倒置の共時的通時的諸相)

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	大室 剛志
委員	名古屋大学教授	田中 智之
委員	名古屋大学教授	滝川 睦

【本論文の概要】

本論文は、英語における場所句倒置と否定倒置の共時面と通時面について最新の生成文法理論の枠組みであるミニマリズムにより論じている。

第1章では、本論文の2つの理論的支柱であるフェイズとカートグラフィーについて説明している。また、この両者を組み合わせた時に、**Force, Top, Foc** はフェイズ主要部となるが、**Fin** はフェイズ主要部とならないと論じている。

第2章では、現代英語の場所句倒置について論じている。現代英語の場所句倒置は非対格動詞が用いられたものと非能格動詞が用いられたものとの2種類がある。前者は、主語名詞句が軽く、場所を示す前置詞句が主語性と話題性を示す。後者は、主語名詞句が重く、場所を示す前置詞句が話題性しか示さない。この両者の相違は、両者の統語派生の相違により説明されると論じている。すなわち、前者には、Chomsky (2008)の **independent probing** が関与し、重名詞句転移は関与しない。後者には、**independent probing** は関与せず、重名詞句転移が関与する。

第3章では、場所句倒置の通時的側面について論じている。古英語及び中英語の定形動詞は屈折形態の豊富さのため、**Tense** を経由し **Fin** まで移動していた。この時代には、(i)動詞句の外に主語を持つ場所句倒置、(ii)動詞句内に主語を持つ非対格動詞の場所句倒置、(iii)右方移動を受けた主語を持つ非能格動詞の場所句倒置の3種類が存在していた。しかしながら、中英語後期に英語の定形動詞の屈折形態が貧弱になると、定形動詞は移動せず、動詞句内に留まる。このため(i)の場所句倒置は消失するが、(ii)と(iii)の場所句倒置は依然として残り現代英語の場所句倒置に繋がると論じている。場所句倒置の歴史変化を歴史電子コーパスから得た資料に基づき分析している。

第4章では、現代英語の否定倒置について論じている。文否定要素と時制とが極性関係を築くため、両者は同一の転送領域になければならない。この仮説により、現代英語の否定倒置の基本属性、否定倒置とその他の非項位置への移動操作との相互作用、更には、倒置がない否定文の属性までもが統一的に説明されると論じている。

第5章では、否定倒置を中心に否定要素が文頭を占める文の通時的側面について論じている。古英語及び初期中英語における **ne** 文頭構文の派生を論じた後、その構文の衰退と消失について、否定句の指定部に生起する副詞句としての **ne** と否定句の主要部に生起する語としての **ne** との競合によると論じている。この競合による説明は、15世紀に生じ18世紀に消失した **not** 文頭構文の衰退と消失についても平行的にあてはまるとしている。中英語において否定呼応がある時には主語助動詞倒置が起きないのは最後手段によるためと説明している。Not 以外の否定要素による否定倒置の出現について論じ、最後に **ne** や **not** が文中に生じた否定文についても説明を与えている。否定倒置の歴史変化を歴史電子コーパスから得た資料に基づき分析している。

第6章は本論文全体の要約及び結論にあてられている。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文は、英語における場所句倒置と否定倒置の共時面と通時面について、最新の生成文法理論の枠組みであるミニマリズムにより、体系的且つ包括的に論じた優れた博士論文である。現代英語の場所句倒置と否定倒置に関する先行研究はいくつかあるが、それらの歴史変化の実態を明らかにしそれに理論的説明を与えた通時的研究となると皆無である。この研究の空隙を埋めた本論文には、英語の場所句倒置と否定倒置に関し、事実面と理論面における多大な貢献が含まれており、非常に高く評価される。

事実面では、場所句倒置と否定倒置の歴史変化の実態を、歴史電子コーパスを用いた独自の調査により初めて明らかにした点が評価される。第3章で、古英語及び中英語では3種類の場所句倒置が存在していたが、中英語後期に動詞句の外に主語を持つ場所句倒置が消失し、残りの2種類の場所句倒置が現代英語まで残ったことを明らかにした。第5章で、**ne**文頭構文と**not**文頭構文の衰退と消失の歴史変化の実態、中英語において否定呼応がある時には倒置が見られないこと、**not**以外の否定要素による否定倒置の出現時期とその頻度の推移とを明らかにした。これらは事実面での貢献である。

理論面では、第1章で導入したフェイズとカートグラフィーを組み合わせる方策を用いることで、英語における場所句倒置と否定倒置の共時面と通時面の諸現象に対して、現在のミニマリズムの枠組みの中で、一貫した理論的説明を与えることが可能であることを論文全体の議論を通して示し得た点が最も評価される。第2章では、現代英語の非対格動詞を用いた場所句倒置と非能格動詞を用いた場所句倒置の相違に対して、前者には Chomsky (2008)の **independent probing** が関与し重名詞句転移は関与せず、後者には **independent probing** は関与せず重名詞句転移が関与するという両者の派生の相違によって理論的説明を与えることに成功している。第3章では、動詞句の外に主語を持つ場所句倒置の消失を、中英語後期に英語の定形動詞の屈折形態が貧弱になった事実に関連させて見事に説明している。第4章では、文否定要素と時制とが極性関係を築くため、両者は同一の転送領域になければならないという仮説により、現代英語の否定倒置の基本属性、否定倒置とその他の非項位置への移動操作との相互作用、更には、倒置がない否定文の属性までも統一的に説明することに成功している。**ne**文頭構文と**not**文頭構文の衰退と消失の歴史変化を経済性を背景にした競合により、平行的に説明した点も見事である。中英語において否定呼応がある時には倒置が見られないという言語事実に対して最後手段による説明を初めて与えた点は圧巻である。

表記上のミスがわずかに見られた点と、敢えて言えば、焦点句と否定句のフェイズ性に関して、もう少し踏み込んだ検討が必要だった点を除けば問題点は見られない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与されるに相応しい水準の研究であると判断した。

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果の要旨